

海外だより

カンボジアに「体育」が誕生した

中村学園大学教育学部 中島 憲子

今春3月、DSPLEA PROJECT (*Developing Sport and Physical Literacy Education for All*) の一環として、カンボジアへ視察調査に向かいました。このプロジェクトメンバーは日頃から共同研究を行っている複数の大学の先生方で構成されています。その中に2度ほど機会を得てカンボジアを訪問された先生がおられ、「とにかくカンボジアを自分の目で見て欲しい」とおっしゃっていました。その理由を探る為、そして全世界から相当な支援と国際協力が行われている国で、私たちにできることは何かを明らかにするために、シェムリアップ近郊とその北部(街から130キロ)にある農村部の学校を訪問することとなりました。ここでは、この渡航において得たカンボジアのシェムリアップ近郊に生きる子どもたちの生きる姿と体育の実態を報告いたします。

1. カンボジアの教育と子どもたちの学びの実態

私がシェムリアップに滞在した約6日間で、市街地の小学校1校、幼稚園1園、市街地近郊の小中一貫校1校、北部の農村部の小学校3校、小中一貫校1校、そしてシェムリアップにある小学校教師を育成する教員養成所を訪問することができました。トンレサップ湖にある水上学校も含めると、10校近くの学校を訪問したことになります。

カンボジアは6-3-3-4制システムを取っていて、小学校入学から中学校卒業までの9年間、無償による義務教育を受ける権利を有する(第68条)とカンボジア王国憲法に謳われています。しかし実のところ「年齢が6歳になる子供を、学校における普通教育プログラムの第一学年に就学させること(教育法2007, 第36条)」と抜粋事項に記載されており、入学時にはクラスに一杯詰め込まれた子どもたちが、徐々に家庭の事情(労働力としての家事, 子育て)に伴い、1教室あたりの児童数が減少していく実態にあります(地域によっても随分と異なります)。また、進級できずに留年する子どもたちが各学年に1~2割ほど存在するので、例えば小学一年生のクラスに6歳から13歳までの子どもたちが一緒に授業を受けているという風景(重層化)が見渡せます。データ(2011. JICA)によれば、

小学校の就学率が94.8%, 前期中等学校(中学校)で31.9%, 後期中等学校(高校)では19.4%と、中学時の就学率の極端な低下は、小学校時の進級に伴って、就学率が低下していくことを物語っています。このように、貧困や地域間格差が顕著な状況ですが、訪問先で子どもたちが勉強できることへの幸せ感を醸し出したイキイキとした眼差しと、休み時間に校庭へ飛び出し、個々の興味ある遊びに興じている姿をみた瞬間、これまでに味わったことのない身震いを覚え、また目頭が熱くなり、この子どもたちのために何か力になりたい、という思いを強くした初日でした。

2. カンボジアの体育

カンボジアでは、小学校における正規の授業として、「国語(クメール語)」「算数」「理科」「社会(芸術含)」の4科目で展開されていますが、実は2年前、カンボジアに、ナショナル・カリキュラムレベルで教科としての「体育」(週2時間)が初めて導入されることとなりました。そして、教科としての導入に併せて、教員養成所において、教育としての「体育」が養成カリキュラムの中に展開され、教師を目指す教育実習生が実習先の小学校で体育の授業を展開している光景を目にすることができます(私が渡航した際は残念ながら行われていませんでした)。日本では、すでに学校の中に「体育」という教科が存在しているので、勉強するモノ、学ぶモノ、という存在に何ら違和感はありませんが、何もないうところに「教科としての体育」の誕生という歴史的な瞬間がいまのカンボジアで進行しているのです。しかしながら、現実にはその歴史的な瞬間という感動が見当たりません。

そもそも、子どもたちが教室で勉強している状況において、教科書は持っていません。ノート、筆記具も一部の子どもにちらほら見当たりますが、小さなホワイトボードや板に黒く塗ったものをノート代わりに使って、書いては消し、を繰り返します。市街地にある5000名を超える児童が通う大規模の小学校においてこの状況、そこから車で10分も走れば、ノートや筆記具はおろか、靴すら履いていない子どもたちです。こういった環境において、当然体育用具など充実するは

ずがなく、体育用具倉庫はおろか、ボール籠すらありません。農村部の小学校の校長先生に、「体育用の用具はありますか?」と聞いてみると、子どもたちが勉強している教室へ入り、おもむろに転がっているバレーボールを持って「これです」と差し出してくれました。また別の学校では、校長室の中にあるカギのかかった小部屋から、一つのサッカーボールを持って来ていただきました。

つまり、学校において体育という教科を実施するためには、当然のことながら、様々な諸条件が検討されなければなりません。例えば、道具や施設など、運動やスポーツを行うための整備は不十分で、運動やスポーツの行い方やルールに関する知識などの情報もない、客観的な条件はこういった状況です。また、家庭や保護者の学校に対する理解や、地理や気象などの地域的な条件面では、子どもたちには勉強よりも仕事(ボル・ポト時代を生き延びた農民たちの中には「教育がないから生き延びた」という消し難い記憶の残る教育への無理解)といった理解や、雨季と乾季による劣悪な衛生環境など、体育やスポーツ活動に向かない条件もあり、定着しにくい状況にあります。

しかし、主体的な条件とされる学習の主人公である子どもたちや教師、また教育活動をプランニングしたり、全体を調整したりするコーディネーターなど、人に関わる条件面では、実際に子どもたちは外の温度が35度を超えようが、嬉々として外遊びに興じるし、子どもたちのために学校を良くしていきたいと考えている校長先生の姿がありました。この様子から、私たちが持つノウハウと知恵を出し合って、カンボジアの子どもたちに応じたカンボジア版学校体育へ向け、一筋の光明を見出した学校訪問となりました。ただし教師は、教職による給与では家計が成り立たず、ほとんどの教師は始業前や始業後に副業を持つため、子どもたちと一緒に遊ぶ様子も見られないし、楽しみながら教師を行っているという状況ではないといった悪条件の中で過ごしています。この容易に解決できない状況も含めて、私たちにできることを探っているところです。

3. 私たちにできる協力と支援

当初、国際協力という意味においてはほんやりとしており、どちらかと言えば学校訪問に胸を躍らせての渡航でしたが、現地へ入って学校教育の現実を知るほど、子どもたちのエネルギーに応えなければならない、物資的な支援ではなく、これまで私たちが専門として取り組んできたことをカンボジアの必要に合わせて教育

支援していくことが私たちの使命だと実感しました。

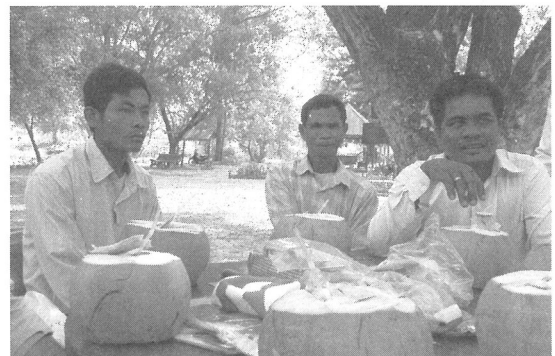
カンボジアは、世界各国が競い合って支援と援助をし続けており、皮肉にも「支援慣れ」「援助慣れ」によって、長期的な視点からすると被援助者の独立心を殺ぐ要因として負の効果を発揮するといわれるほどです。だからこそ、カンボジアに本当の意味での体育が誕生しようとしている今、現地の子どもたち、校長先生、教師、保護者、地域の人々に必要な体育の授業を、体育行事を、運動クラブ活動を、どのような形で協力および支援をしていけるのかを、多くの研究者、専門家、学生、一体となって取り組む機会を与えてくれた渡航となりました。



↑ 休み時間にゴムとびに興じる子どもたち



↑ 授業についていけない子どもたちだけをまとめて、授業が終わった優秀な子どもが先生役となり屋外で補習



↑ 農村部の小学校。屋外のベンチで出迎えてくれたのは若い校長先生(左)と退職した元教師(中)、そして出された飲み物はヤシの実一人一個。

保健医療経営大学

保健医療経営大学 藤原大樹

保健医療経営大学は、2008年福岡県みやま市に、社会医療法人「雪の聖母会」聖マリア病院の支援によって設立されました。設置されている学部は保健医療経営学部の一学部であり、総学生数128名、専任教職員数34名の小さな4年制の単科大学です。

大学キャンパスは、福岡県南部の筑後平野に位置し、約10万m²という広大な敷地に、講義室、ゼミ室、図書館、IT演習室、食堂、サークル棟、トレーニング棟、グラウンドといった施設・設備を有しています。

建学の理念は、少子高齢化や医療のグローバル化といった環境の変化に対応し、保健医療分野に山積する様々な課題を解決するために必要とされている「保健・医療・福祉分野の経営を担う人材を育成する」ことを通して、我が国及び世界において人々が等しく高い水準の健康を享有する社会の実現に貢献することです。

大学のカリキュラムの特徴は、人体の機能と構造や医学総論といった「医学の基礎」、介護保険制度や医療保険制度といった「社会保障制度の基礎」、そして経営学や簿記・会計学といった「経営の基礎」を体系的に網羅していることです。このような医療経営学のカリキュラムを学部レベルで提供しているのは、九州では保健医療経営大学だけです。

必要な科目を履修することにより取得できる資格に、社会調査士と上級情報処理士があり、受験資格が得られる資格に診療情報管理士があります。また目標とする資格としては、医療経営士、診療報酬請求事務

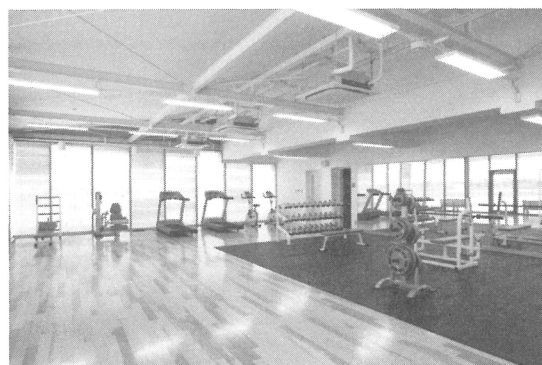
能力検定、医療情報技師、ITパスポート、日商簿記検定試験などがあり、課外講座による指導や個別指導を通して、学生に資格取得を促しています。

卒業後の進路としては、医療機関や保健・医療・福祉系企業に進む学生が多く、平成23年度末に卒業した第一期生のうち約3分の2が病院・診療所に就職し、その他の多くの卒業生も医療機器商社、医薬品会社、生命保険会社など大学で得た知識を活かすことのできる企業に進んでいます。

体育・スポーツに関わる科目は総合科目群（一般教養）に分類されており、「健康・スポーツ実習Ⅰ」「健康・スポーツ実習Ⅱ」「運動と健康」の3科目を開講しています。「健康スポーツ実習Ⅰ」は一年次前期に、「健康スポーツ実習Ⅱ」は一年次後期に開講される必修科目で、「運動と健康」は前期に開講される選択科目です。「健康スポーツ実習Ⅰ・Ⅱ」では、生涯にわたって運動・スポーツに関わる態度や能力を醸成することを目的に、自分自身の健康や体力を理解し、運動・スポーツを通していかにそれらを改善・向上させるのかということについて学びます。「運動と健康」では、高血圧や糖尿病、高脂血症などの生活習慣病予防の観点から健康づくりのための運動・スポーツ実践の方法について学習します。保健医療経営大学では、病院や地域における健康づくりを担う人材育成を目的としているため、自身の健康づくりだけでなく、地域社会や組織における健康・体力づくりに貢献できる運動・スポーツの実践方法や知識を身につけるよう指導



学究の庭



トレーニングルーム

しています。

学生によるスポーツ系サークルとしてはフットサル、野球、バスケットボール、バドミントン、テニスなどが活動しています。しかし、学生数が少ないこともあり、どのサークルも部員集めに苦勞しています。また、それらのサークルはレクリエーション志向が強く、競技志向的に活動しているサークルは、ほとんどありません。

大学が位置するみやま市では、平成24年4月に総合型地域スポーツクラブ「スポーツクラブみやま」が設立されました。このスポーツクラブはみやま市体育協会、みやま市教育委員会、そして大学が主導となって設立したもので、現在、ヨガ教室、ピラティス教室、ニコニコエアロビクス、シルバー運動教室、スポーツ玉手箱（子ども向けオムニバス）、子どもダンス教室の計6種類の運動・スポーツ教室を開講しています。教室の運営はクラブマネージャーと大学の教職員・学生が中心となって行っており、大学の施設や運動・スポーツ用具の提供も行っています。現在、学生は主に講師の助手や事務スタッフとして関わっていますが、将来的にはスポーツ系サークル主導による子ども向け教室の開講を計画しています。



健康スポーツ実習の授業



テニスサークルの活動風景



シルバー運動教室

大学めぐり

熊本学園大学

熊本学園大学 宮林達也

大学の沿革

本年をもって創立70周年を迎えます熊本学園大学の歴史は、1942年(昭和17年)創立されました「東洋語学専門学校」(1945年熊本語学専門学校と改称)に始まります。

戦後は、1949年に第二部(夜間部)を開設した後、新制大学設立に伴い1950年熊本短期大学として新たな一歩を踏み出しました。1954年には、短期大学の商科を熊本商科大学として4年制へと移行することとなり、熊本で初の商科系大学の誕生をみました。また同時に短期大学社会科内に、中学校教員免許(保健体育)を取得できるコースを設置いたしました。

その後、1967年経済学部設置、1994年には短期大学の一部4年制移行に伴い、外国語学部ならびに社会福祉学部を設置し、現在の「熊本学園大学」へと名称を変更し、短期大学を短期大学部として統合いたしました。

この間にも、学科の増設、大学院設置、短期大学部全ての4年制に移行ならびに附属教育機関の設置等を実施し、現在は、2009年社会福祉学部ライフ・ウェルネス学科の設置を以って、4学部13学科(第二部を含む)、5研究科7専攻、附属高等学校、附属中学校、附属幼稚園各1の規模となっています。

2009年に設立されたライフ・ウェルネス学科は、「福祉」と「健康」の融合を基本に、地域社会における健康づくりに貢献できる人材の育成を意図して設立され、本年を以って完成年度を迎えました。

開設科目も体育・健康系の科目に特化することなく、社会福祉系の科目もバランス良く配置し、社会福祉のこころ・知識も合わせ持った指導者育成を目指しています。

したがって、取得できる資格として、中・高等学校教諭一種免許状(保健体育)、健康運動指導士受験資格、日本体育協会認定スポーツリーダー、社会福祉士受験資格並びに社会福祉主事任用資格が可能となっています。

卒業後の進路としては、中・高等学校教諭、医療機関や健康増進施設などでの運動指導者、健康行政にか

かわれる公務員、社会福祉施設などに進んでくれることを願っています。

体育施設

現在、大江キャンパス内と大学から車で40分程の距離にある西合志に体育・スポーツ施設があります。

大江キャンパスには、屋内施設として2階にバスケットボールコート2面(バレーボールコートの場合3面、バドミントンコートの場合12面設置)相当のフロアと1階には剣道場、柔道場、空手道場、合気道場、ダンス場ならびにトレーニング室を設置した総合体育館と卓球を主な使用目的とした第二体育館があります。

屋外施設としては、300mトラック相当のグラウンド、全面オムニのテニスコート10面および25m×15コース(うち6コースは水深4m)のプールがあります。

西合志には野球場2面(うち1面は附属高等学校が使用)、ソフトボールコート2面、サッカーコート1面、ラグビーコート1面およびアーチェリーレンジがありますが、こちらは専ら課外活動で使用しており、今のところ授業では使用してはいません。

大江キャンパスの施設の内体育館以外は、大学専用でなく附属中学・高等学校とで共用している為、来年度附属中学校が全学年揃いますと学園全体として体育施設不足が懸念されるところです。

共通科目としての保健体育教育

本学では、「現代の流動的で不透明な社会を乗り切るために、多方面から健康を分析し、基礎知識と実践方法を修得し、生涯にわたって健康で活力ある生活を送ることができる自己管理能力の養成」を基本の考え方において授業を展開しております。

卒業要件については、大学教育の大綱化が押し進められた際、それまでの保健体育講義2単位、体育実技2単位、計4単位必修から、科目名称も「健康科学」と改め、健康科学A(講義半年2単位)または健康科学B(実技通年2単位)何れか2単位選択必修へと変更いたしました。

その後2002年からは、当時各大学で取り入れ始められていたセメスター制にも対応できるようまた学生の選択肢を拡大するために、全学部2単位選択必修は維持しつつ、実技科目を健康科学BⅠ（春学期開設1単位）と健康科学BⅡ（秋学期開設1単位）に分割して現在まで実施しています。

教育職員免許状取得希望者に対しては、健康科学A 2単位と健康科学BⅠまたはBⅡ何れか1単位の計3単位必修となっています。

また本学でも自由選択科目という制度を取り入れており、講義実技両者合わせて3単位以上修得した場合、余剰単位を自由選択枠として卒業要件に加えることができることとなっています。

授業の開講形態

授業の開講形態としては、健康科学A、BⅠ並びにBⅡともに全学部合併で実施しており、健康科学Aは春学期7コマ（第二部対象1コマ含む）、秋学期6コマを、健康科学BⅠ、BⅡはそれぞれ20コマ（第二部対象1コマ含む）を異なる曜日・時限に配置し、学生が自身の興味や時間割の都合などを考慮して選択できるように配慮しています。

ただ現在、体育系教員が専任7名（ライフ・ウェルネス学科6名、こども家庭福祉学科1名）、非常勤5名の体制で授業を実施していますが、各々所属学科の専門教育と共通科目の担当を兼務している為、年間の担当授業数特に専任にかかる負担度が大きいことが目下の課題となっています。

課外活動

本学では、32のクラブが学生自治会体育委員会に所属して、先ほどご紹介しました体育施設を活動拠点に日々研鑽に励んでおります。

これらの内、卓球、男子ソフトボール、弓道、アーチェリー、バドミントンなどは、九州の一部リーグ所属あるいは全日本大会出場など努力の成果を上げてきております。

またその他の種目でも、個人で九州上位、全日本出場を勝ち取る者もあり、今後の活躍が期待されるとこ

ろです。

しかしながら、現代の若者気質を反映してか、体育委員会への加入率が本年度では全学生の10%強という状況にあり、学外のクラブチームなどでスポーツに取り組んでいる者もいるとは思いますが、学生達のスポーツ離れが危惧されるところであります。

